明石市立江井島中学校　４２回生　第１学年　学年通信
平成３０（２０１８）年１１月２８日　　NO．６３

自分さがし

人権作文発表会 続き

前号で発表会の感想を紹介しました。
前後して申し訳ないのですが、１年生代表の□□□□の作文を紹介します。
思春期のまっただなかにいるみんなにとって、自分の家族のことを語るのは勇気がいることだと思います。しかし、□□□□は正直に兄への思いや母への思いを回想し、成長してきた今だからこその自分の思いを話してくれました。ここに紹介することはもしかすると□□□□の家族にとってはうれしいことではないかもしれないですが、堂々と語ってくれたこの思いを他のご家庭の方々にもぜひ、見て頂きたいと思います。

余談ですが、私はここにでてくる「兄」も知っていますが、真面目な優しい男の子でした。足に障がいがありましたが、そのことを言い訳にするようなことはなく、どんなことも一生懸命に取り組む生徒でした。元気にしてるかな･･･。

１年１組　　「兄から学んだこと」

「今日のお迎えもおばあちゃんだ。」私は少しがっかりした。
本当は母に来てほしかったからだ。

私が５歳の頃に兄は重い病気で入院してしまった。いつも一緒に遊んでくれる兄が急にいなくなってさみしかった。そしてすごく心配だった。

兄が入院した次の日、母と幼稚園に行った。お迎えも母が来てくれると思ったのに来たのは姫路に住むおばあちゃんだった。「なんでお母さんじゃないの？」私が聞くと「お母さんはお兄ちゃんの病院に行ってるからだよ。」とおばあちゃんは言った。家に帰ってもやっぱり母はいなかった。でも代わりにおばあちゃんがいた。その日から、母が幼稚園に連れて行って、お迎えはおばあちゃんが来ていた。

幼い私は、少しずつ兄が嫌いになった。母をとられた気がしたからだ。母に会えるのは朝と夜の短い時間だけ。だから、たくさん話をしたくても、母は忙しくて、あまり話を聞いてもらえなかった。だから「兄が病気にならなかったら、母ともっと話ができたのに。」と私はそう思うようになった。

しかし、母の携帯に送られてきた兄からの画像付きのメールを見て、私はすごくつらい気持ちになった。そのメールには「今日も手術した。痛かったけどがんばった。」と書かれていた。画像には、すごく痛そうな手術の跡があった。特に私が驚いたのは「今日も」という言葉だった。兄はつらい手術を何回もしていたのだ。なのにこの前病院に行ったときは平気そうに笑っていた。でも兄は本当は不安だったんじゃないかと思った。

よく考えれば、私は家に帰るとお母さんはいなくてもおばあちゃんがいた。

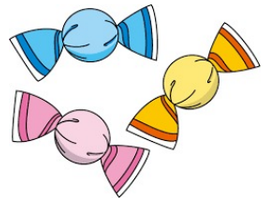
しかし、兄は朝母が来るまで、そして母が帰ったあとはいつも一人。心細かったんじゃないかと思った。それでも私の前では不安そうな顔やつらそうな顔をせず笑っていた兄がすごいと思った。そして、兄だけでなくあの病院にいたたくさんの人たちがつらい思いをして、それでも一生懸命生きていることが本当にすごいな、と思う。

正直、前まではそんな障がいのある人を変だな、と思ってしまったことはあった。でも、兄が障がいのある人になったことで、そんな人たちをつらい思いをしても一生懸命生きるすごい人なんだと思えるようになった。

そして、その人たちは家族や友だち、看護師などのたくさんの人たちに支えてもらっているのだ。私の兄もクラスの人たちから励ましの手紙をもらったり、何十人もの人たちに支えられて退院することができた。私は人が生きていくには誰かに支えてもらうことが必要だと、兄を見ていて思った。

私は今までに何人の人に支えてもらいながら生きてきたのだろう。これからは、支えてもらうだけではなく、たくさんの人を支えていけるような存在になりたい。こう思えるのは私に兄がいたからだと思う。

ホントはどうなの？



今まで３回、１年生の教室やトイレでアメ（ハイチュウ？）の包み紙がでてきたことがありました。　そして、今日４回目がありました。
これを聞いてみんなはどんなふうに受け止めますか？
先生たちは１年生が学校でアメなどを食べているとは考えられません。たまたま、落ちてしまったのだと思いたい･･･。けれど、４回めともなると本当は先生達の知らないところで？！　なんて疑いたくなります。
人を疑うことは悲しいことです。失った信頼を回復することは時間がかかります。
しかし、失敗はしてしまったら次にどうするかです。みんなで考えてみてください。